

杉本秀太郎

平家物語

講談社

平家物語

杉本秀太郎

講談社

| 著者 | 杉本秀太郎 1931年、京都生まれ。京都大学文学部仏文科卒業。
現在、国際日本文化研究センター名誉教授。専攻はフランス文学。日本文
化、日本の古典を扱うエッセイも多い。著書に『洛中生息』『回り道』（み
すず書房）、『文学演技』『伊東静雄』（筑摩書房）、『徒然草』『パリの電球』
『洛中通信』（岩波書店）、『大田垣蓮月』（中央公論社）、『花ごよみ』（講談
社）『みちの辺の花』（共著・講談社）、訳書にフロマンタン『昔の巨匠た
ち』（白水社）など多数。

へいけものがたり
平家物語

1996年2月25日 第1刷発行 1996年10月21日 第6刷発行

著者 すぎもとひでたろう
杉本秀太郎

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2丁目12-21 郵便番号112-01

電話 編集部 03-3943-2611

販売部 03-5395-3624

製作部 03-5395-3615

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社



© Hidetaro Sugimoto 1996, Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。

本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは学術局あてにお願いいたします。

ISBN4-06-207834-1（術）

N.D.C.910 474p 20cm

平家物語・目次

祇園精舎／殿上闇討・すかめの瓶子 唐瓶子／鱸・海と平氏の因縁

吾身栄花・六波羅と櫻町／祇王・本地垂迹／二代后・世の乱れ

清水寺炎上・音と火／殿下乗合・はだれ雪／鹿谷・戯言と歌占

鵜川軍・白妙／御輿振・文が武に勝った話／内裏炎上・猿の松明

座主流・次郎焼亡その後／西光被斬・応酬の果て／大納言死去・成親の扱い方

徳大寺之沙汰・嚴島は女護の島／山門滅亡 堂衆合戦・治承の世

康頼祝言 卒都婆流・見立て熊野／蘇武・翻訳について

赦文・たりのなかの政治／足摺・脚色また脚色／御産・馬、鰐

公卿揃 大塔建立・呪術師清盛／少将都帰・吾をつるおす涙／有王・高野山と熊野

辻風 医師問答・重盛の死／無文・重盛像／金渡 法印問答・伴信友のこと

大臣流罪 城南之離宮・罪なくして配所の月

敵島御幸 還御・なごりの遊樂／源氏揃・主と通化／馳之沙汰・女装の落人

信連・名こそ惜しう候へ／競・馬また馬／競（続）・太郎冠者

山門牒状他 橋合戦・窮馬と函谷關／橋合戦（続）・敵も味方も見物す

橋合戦（続々）・馬筏／宮御最期 若宮出家・浮藻のかげ

都遷 月見・風ふく原／物怪之沙汰・枕に立つ影／早馬・石橋山合戦のこと

文覚・引用の後始末／富士川・怯え／富士川（続） 五節之沙汰・文使いの古態

都帰 奈良炎上・美濃尾張という地名／奈良炎上（続）・戦争の惨禍

新院崩御・朝廷の正月・腹赤のこと／新院崩御（続） 紅葉・和歌と漢詩

葵前 小督・心の色深くして／廻文 飛脚到来・義仲の登場

入道死去 築嶋・あち死に／祇園女御（後半）・洲俣合戦の知盛

慈心坊 祇園女御・ふたつの抜穴／嗟声 横田河原合戦・改元二度の世

清水冠者 北国下向 竹生嶋詣・馬の草飼

火打合戦 願書 俱利迦羅落・斎明と寛明／篠原合戦・無残

実盛・変化三態／還亡 牒状 主上都落・都の内と外

維盛都落 忠度都落・非力の系統

經正都落 一門都落 福原落・下弦の月

山門御幸他 太宰府落・後白河法皇

征夷将軍院宣 猫間他・法皇と頼朝と義仲

宇治川先陣 河原合戦・文学と想像力／木曾最期・義仲、西行、芭蕉

六ヶ度軍 三草合戦・在家の難／老馬 坂落他・裏をかく

忠度最期他 小宰相身投・蓮の花

●
十

首渡 内裏女房他・三種の神器のかけ引き／戒文 海道下 千手前・法然、まことの色

361

横笛他 維盛入水・異説のやぶ／三日平氏 藤戸・国の費へ、民のわづらひ

●
十一

大地震 逆櫓他・逆眺みやむなし／那須与一 弓流・小兵ふたり

393

壇浦合戦他 内侍所都入・運命變／劔他 文之沙汰・始末の段

副将被斬他 重衡被斬・染め分け

●
十二

紺搔之沙汰他 判官都落・物語も下降する

433

吉田大納言之沙汰 六代・断絶平家

灌頂卷・なだめの文学

449

結びに代えて・ひとりの読者

あとがき

462

人名索引

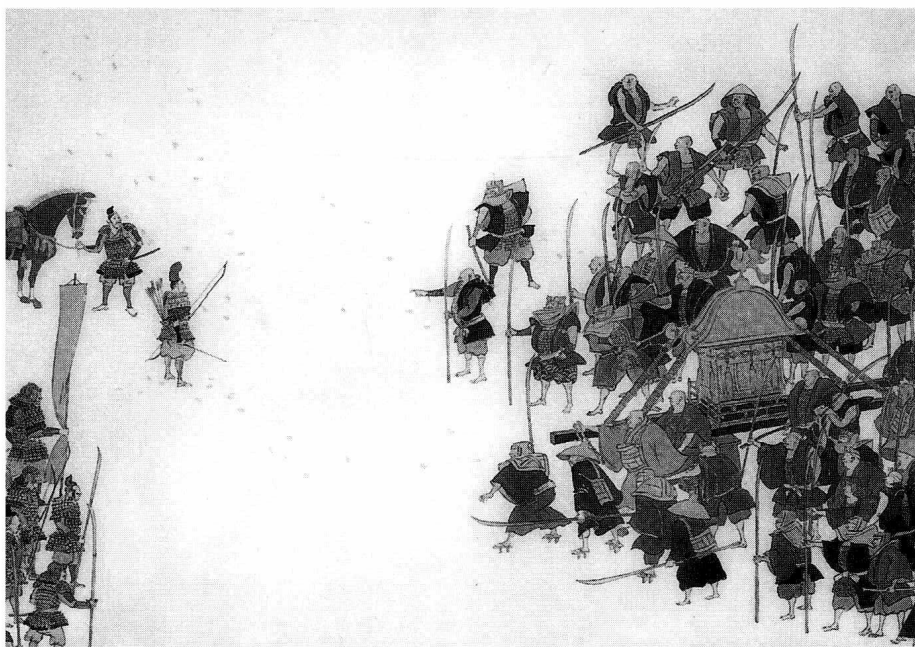
474

装幀・本文装画Ⅱ安野光雅
目次・扉レイアウトⅡ山岸義明

平家物語

卷

一



御
興
振

祇園精舎
ぎおんしやうじや

『平家』を読む。それはいつでも物の気配に聴き入ることからはじまる。身じろぎして、おもむろに動き出すものがある。それにつれて耳に聞こえはじめるのは、胸の動悸と紛らわしいほどの、ひそかな音である。『平家』が語っている一切はとつくの昔、遠い世におわっているのに、何かのはじまる予感が、胸さわぎを誘うのだろうか。それとも、何かのおわる予感から、胸がざわめきはじめるのだろうか。

あることのはじまりは、あることのおわりであり、逆もまた然りとするなら、私が予感とともに待ち受けているのは、まさしくこの世の無常の姿、いのちを享^うけたものすべてがたどる一栄一落の有様以外のものではない。『平家』を読む。このとき、かすかな胸さわぎが絶えないのは物怪^{もつけ}の幸いである。

『平家』冒頭の誰でも知っているくだりは、これから語り出されるものをよく聴き給えということ

を、ああいう喩えで語り出したのである。天竺というおそろしく遠い国の、奥も知れない林のなかに埋もれてしまつて、たしかめようもなくなった祇園精舎から、どこからともなく吹く世外の風に乗る、はるばる鳴りわたってくる鐘の聲。どんなものよりも近い自分の肉体という場にたしかめることのできる胸のざわめき。相隔たること最も甚だしいこのふたつが、時として、ひとつにかきなるのは、念仏を唱える人の両のてのひらが合わされるのと同じくらいに自然なことではないだろうか。いま、耳の底にかすかに鳴っているものを「祇園精舎の鐘の聲」と思うなら、たしかにそれは「諸行無常の響きあり」である。私の胸のなかにあつて瞬時も鼓動しやめないものも、いずれは停止する。これほどたしかなことはない。胸の動悸が諸行無常の音となつて聞こえはじめたにしても、わが耳を咎め立てるにはおよばない。いずれ、ほどなく、諸行無常という唱え言よりも、もっと耳をそばだてて聴かずにはいられないものが、琵琶の響きとともに次から次にとあらわれてくるだろう。耳をせいぜい敏感な状態に保つておくこと。この用心を忘れぬことにしよう。

だが、聞こえてくるものに聴き入る用意をととのえていると、もう一方では、見えてくるものに目をとめよという声もまた耳に入る。動くものはいうまでもない。動不動にかかわらず、色あるものの色、彩りあるものの彩りに目をとめるべし、とその声は告げている。冒頭のくだりを念のために引き写すと、

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらはす。

おこれる人も久しからず、只春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、偏へに風の前の塵に同じ。

はじめに音を言い、諸行無常を言ったあとで、色を言い、盛者必衰を言うのは、勿論、対句の形式にもとづいてのことである。仏教説話によれば、釈迦がクシナガラで二本の娑羅の木のあいだに横臥して涅槃に入ったとき、淡黄色の娑羅の花が白変した。そこで釈迦入滅の地を白鶴に喩えて鶴林と称する。いのちの果てで白く色あせたものも、もとはそれぞれのいのちの色に燃えていたのに、と対句後半は言いたいらしい。

白が地の色として布かれたことが大事なことである。この白地は、のちの物語に、あでやかな色、きらびやかな色、猛々しい色、しつとりと落ちついた色、物さびた色、重く沈んだ闇の色が、それぞれに映え出す用意なのだと言得される。のちの物語を絵巻物のように楽しむつもりなら、霧にとぎされた冬の朝のように白いだけの世界を、つとめて思いえがくに限るだろう。しかし、『平家』が昔の絵師たちを誘惑し、近代、当代の画家たちに恰好の画題を提供し、えがかれた絵が人を魅了するのも、あるいは白変した娑羅の花の色が、われわれの眼底に染みとおっているからなのかも知れない。自然界が人界の異変に感応して示した一瞬裡の白変は、いつしかわれわれに無常を悟らせる色となり、すべて色あるものの示す色はやがて無常の白変を蒙り、ただ追憶のなかに再生する限りにおいて、もとのいのちの色を回復する。この経緯に注目すれば、『平家』が絵巻物あるいは大小の画面よ

りも能舞台に、もっと多くの主題を提供し、あんなに多くの主人公たちを幽明の境に出没させるにいたったことに、何ら不思議はないように思われる。

『平家』巻頭の「祇園精舎」は、ほどなく調子をあらためて、天下の乱れを招き「久しからずして、亡じにし」高位高官の例をまずは「遠く異朝」にたずね求めて中国の諸例を挙げ、次いで「近く本朝」をうかがふに、承平の将門、天慶の純友、康和の義親、平治の信頼と並べ立てたあとに、「まぢかくは、六波羅の入道前太政大臣平朝臣清盛公と申しし人のありさま、伝へ承るこそ心も詞も及ばれね」と、話題を清盛のことに絞る。この人、桓武天皇の第五皇子を祖とし、それより九代の後胤になるという。祖父は讃岐守正盛、父は刑部卿忠盛。「かの親王の御子高見の王、無官無位にしてうせ給ひぬ。その御子高望の王の時、始めて平の姓をたまはつて、上総介になり給ひしより、忽ちに王氏を出でて人臣につらなる。」高望の王の子よりのち、清盛の祖父正盛にいたるまで「六代は諸国の受領たりしかども、殿上の仙籍をばいまだ許されず。しかるを」と一転した物語は、これより清盛の父忠盛が昇殿を許された次第に移る。撥の音にわかに高く、息使い切迫して、せわせわしい。

付記。『平家物語』本文の引用は一方流語り本系の覚一本を底本とする『岩波・日本古典文学大系』に拠りますが、その他の諸本を引用するときはそのたびに断りをしるすでしょう。